

高月掛斐線山村の觀察

小 牧 實 繁

木 村 憲 治

は し が き

本稿は昭和十一年五月十六・十七・十八・十九の四日間に亘り筆者等が近江國伊香郡木本から美濃國掛斐郡掛斐に至る高月掛斐線（起點、北陸線高月驛）の山村に就いて調査した際の覺書である。近江側では高時川と支流杉野川との合流點川合から、美濃側では掛斐郡津波に至るまでの村々に就いての記述がこの中に發見せられるであらう。記述は川合から始めて津波に至ることとする。

川合には式内國寶佐波加刀神社がある。聚落の古さが偲ばれる。運搬具にはオヒナハ、セタがあり、セタにはマオヒ（負ふための繩）を附けてゐる。籠にはタケカゴ、キカゴがあり、ナタを入れる籠はナタイレカゴである。

高月掛斐線山村の觀察

菅穴地藏尊、神社かと思はれる祠の中に地藏尊が祀られてあり、穴あき石が献ぜられてゐる。吉野の奥あたりで見られる民俗が此所にも見られるのである。（その後、彦根の東方芹谷村^{アケ}山女原でも同様のものを見た）

音羽は元來はその東方の谷、現在のところから十町ばかり東の谷間にあつたものである。明治二十七、八年の水害の時に現在の立地（元來の地名は黒瀬）に移りその後二〇年ばかりのうちに段々に全部が移轉してしまつたのである。家は十五、六戸、水田は若干あるが米は不足で食ふだけは取れず川合方面から買ふ。米屋が持

つて來るのである。その川合も米は食ふだけの

二割もとれず、主として炭焼をやつてゐるのである。元來官林であつたのを拂下げたのだ相だが川合から杉本に至るまで川合の共有林であるといふ。音羽も山が主で、炭・割木を作るが、勿論炭の方が主である。炭の仲買が買ひに來る。

また養蠶も盛んにやる。こんな譯で音羽には牛は一頭も居らぬ。耕作には杉野のものが牛を連れて傭はれて來る。一日の耕田面積一段半、賃銀

は人・牛の食事は別にして一日三圓であるといふ。耕作の際、辨當を使ひ雨を避ける野小屋といふのがあるが、勿論晝のみのもので夜は泊らない。尙、役畜としては杉野に牛が三頭ばかり金居原に牛が四、五頭居るのみであるが、馬は荷馬車用のものが杉野、金居原に合計二〇頭ばかりゐる。この邊も雪は多いところであるが、雪に關してガブルといふ方言がある。センマイを蒔の上に乾してあるのを見た。また萱を運ぶ女に聞いたら、萱は屋根を葺くのに使ふ、又青

い儘を肥料にやるとのことであつた。

杉本は農業を主とし、(比較的廣い水田が開けてゐる)副業に養蠶をやつてゐるが、米は食ふだけはとれず、北富永、古保利方面から買入れる。養蠶は春蠶もやるが、今年は雪が深く畑の上の雪が消えたのが四月末で、桑が全滅であつたため(畑は桑を主とする)春蠶は不可能であつた。山稼ぎもやり炭を燒き又薪をとる。氏神は村社六所神社。

杉野は上・中・向ひの三字に分れ各字が氏神と寺とを有つてゐるが、向ひの上にある村社式内横山神社が杉野全體の氏神となつてゐる。御神像は衣紋が左前で古式のものである、神社は元來横山岳の中腹、經ノ瀧と御銚子ノ瀧との間にあつたものであるといふ。五萬分一地形圖によれば杉野の西北の山の上に神社の記號があるがこれは今では横山神社に合祀せられてをり、後には千手觀音だけが残つてゐる。元來は廿五番であつたのを六波羅に株を賣つたのだといひ、

又この邊には坊の跡が多く残つてゐるといふ。杉野は昔はもつと隆えたものである。廣瀬や坂本などの美濃の人^{カドニウ}も揖斐に出ないで杉野の方へ出るものが多かつた。今でも門入^{カドニウ}の人がホハレ峠を越して川上に出、川上から八草峠を越して杉野に出、沼波^{ヌナ}へ治療を受けに來る相であるが(沼波は骨折、脱臼などの治療で有名である)これは、特殊な場合であるとしても、此の古くからの傳統の名残を示すものである。そして杉野には當時大間屋があり家が三百軒もあつたといふ。それが次第に衰へ、北海道に出るものなどもあつて、家數は大いに減じたのである。杉野には水田もあるが、米は勿論不足で、以前は山に蕎麥、稗^{アツキ}、小豆等を作り、(焼畑であつたと思はれる)キメシ(白米飯)を食ふことはめつたになくヒエメシを食つたものであり、また山に出來るヨボの木^{ヨボ}の葉を刻んで米に混ぜたものであるといふ。併し當時の人の方が力仕事もよくしたと老人達は嘆くのである。以前のことを

言へば、里人はゴンヅリ、ランヂを穿き、ヂハバキを着けたもので運搬にも以前はセタを用ひずオヒナハを用ひたのであるが(セタは美濃から入つた譯ではないと言ふ)カルサンは用ひなかつた。(今カルサンに似た安全バツチなるものを穿くものもあるがこれは數年前からのことで、丹後の人とかが賣りに來たものであると云ふ)また以前は電燈は勿論なくコエマツをたいて燈火とし、これをヒタキダイ又はマツビダイと稱した(電燈がつくやうになつて中止した)といふ。併し必ずしも以前とは言はなくとも、杉野には未だ古式なものが數多く残つてゐるのである。雪の時にカグツ(深グツの約音か)を穿くのは珍らしくないとして、吾々の泊つた宿屋へ風呂を貰ひに來た一人の女は箱提燈^{ハコチヨウテン}をさげて來たのであつた。此の宿屋なんかも、淋しい田舎の宿屋であるのに、雪の關係もあるにはあらうが、大黒柱なんか一尺角(實測三四厘角)の櫓を用ひてゐて薄つぺらな近代人を驚嘆せしめるのであつ

た。さうかと思ふと第一圖に見る藁葺の二階建のやうな珍らしいものもある。圍爐裡は勿論あ



第一圖

くなつたと言ふのであつた。尙ほ杉野から横山嶽に至る白谷、ここから菅並に至る峠では霞網でツムギが獲れる。但し鳥取りは美濃の方から來るとのことであつた。

金居原の田は出口土倉デゴツチクラの上にまで及んでゐる

り、上にアマ、がかかり、中にカナゴがあり座はオトコバの左側がオナゴバ、右側がヒタキバである。併しそれにも近代化は免れぬ運命で昔の大きなアマは次第に無

が、併し何と言つても土地が狭い上に明治二十九年の洪水で此の谷の田は凡て行かれたために米は不足で千俵は他から買はねばならぬ。金居原から金鷺岳に至る須亦谷スミヤダニに金・銀・銅鑛があり、金は含有量百萬分五―七に及ぶとのことであるが未だ試掘の域を脱しない。またこの村には獵師が二人ゐる由であるが、銃獵をやるくらゐで大したことは無いらしい。金居原では炭焼を主にしてゐるのである。ナカマモノと稱する區の共有林即ちキワラ(木原)があつて其處からヨボハキ、シデハキ、イタキ、モミヂ、ハンサ、メヅラ、トンネチコ等の雜木を切つて炭を焼くのである。細木を残して炭焼の木を切るのをヌキキリと稱してゐるが、現在では細木を多く残して切れば縣より賞があることになつてをり、また、木原の雜木を切つて後に桑など植ゑること、畑を作ることは勿論禁ぜられてゐる。木原を焼くことは勿論許されないことであるが、草ツキの分を焼いて畑とすることは許可を受けれ

ばできないことはない。美濃では野焼きと言はれる由であるが、金居原ではカンハヤキ若しくは單にカンハと言はれ、夏土用前に焼いてそのあとに大根を蒔き、(また蕎麥を蒔くこともある)、大根(蕎麥)のあとには小豆を蒔き、若しその土地が肥えてゐるならばそのあとに又小豆を蒔くのであるが、それで一輪作は終る。それを十年も放置すれば土地は又肥えて來るのである。これは山家の食料獲得上止むを得ない手段であるであらうが、これが江濃の山奥で猛烈な雪崩を惹起す一誘因となつてゐることは後に詳述するであらう。山の濕地には蒲ガヤを植ゑることがあり、これがハバキの材料になるのである。またミツバインチゴが認められるがこれは自生である。尙、山では針金のワナを掛けて置いて兎をとることは立山や乗鞍などの地方に於けると同様である。金居原では、冬は野菜類を容れ夏は桑を入れる地下室を有つ家を見たが、此の設備は近頃のものらしい。氏神は村社八幡神社と

春日神社。金居原の上に阿蘇谷橋といふのがあ
るが、この阿蘇谷は同じ近江も高島郡安曇川上
流の麻生谷などと語原を同じくするものではな
からうか。

出口土倉デゴツチクラには、五萬分一地形圖によれば、水
田があるが、これは前記の如く金居原のもので
ある。元來出口土倉は明治二十七、八年の水害
で土倉から四、五軒が出た出戸デゴであり、後記の
如く土倉は炭焼を主にしてをつた關係から出口
でも炭焼を主にしてゐた。現在も家は残つてゐ
るが實際は住はれてゐない。殊に今年の雪は大
雪で出口の家も全壊若しくは半壊し、一軒の稍
完全なものには人が居て雪融け後の畑の手入を
してゐたがそれは土倉からの出作であつた。そ
してこの家も勿論炭を焼くのである。他の四軒
は或ひは長濱に出、或ひは北海道に渡り、或ひ
は死に絶えて無くなつたと言ふ。

土倉は元來は炭を焼く部落であつた。彦根サ
ン(彦根の殿さま)の御用炭を燒きに柳ヶ瀬から

炭焼がは入つて開けた部落であつた。カ、マ、コ、八軒あり、一時はそれが十三、四軒にもなつた。とがあり、その炭を杉野、金居原のものが負つて飯ノ浦、山梨子、更に南の方では片山^{カタヤマ}など湖岸の港まで出し、それが年貢料となつたのである、これ等の港から炭は湖上を彦根に運ばれたのであると言ふ。それが後に記す如く土倉に鑛山が開けて炭焼の方は稍衰へ残る家は六、七軒となつた。そこへ明治二十七、八年の水害が來て、四、五軒は出口土倉へ出、炭焼を續けたが、今は出口には住はず土倉に歸つてゐるのである。そんな譯で土倉にも尙土倉の家が六、七軒あり炭焼稼業をやつてゐるが、現在の土倉は寧ろ小規模ながら鑛山聚落と言はなければならぬ。土倉鑛山は金、銀、銅、硫化鐵鑛を産し、今日までの投資額は百五、六十萬圓で、東京日本橋田中鑛業の手で手掘りをやり鑛石は馬車で木之本に搬出する程度であつたが、一昨年(昭和九年)十一月三日、日本窒素の子會社、朝鮮鑛業開發に買

收せられ、現在では従業員既に百拾人くらゐに達してゐる。(昭和十一年五月現在)そのうち三分一強は土地の人、他は全國の諸所から集つて來てゐる人達である。現在の土倉の聚落では、前記の如く六、七軒は土着のものであるが、それも現在では多くは鑛山で働き、炭焼をするのは今では二軒に過ぎない有様であり、他は凡て鑛山關係のもの(飯場・住宅等)である。因みに全鑛山では將來川合の發電所で電力を得、昭和十一年六月中旬には木之本に至る索道も完成する筈(既に完成した筈である)との話であり、凡て機械化による大規模の經營が行はれ、又土倉鑛山で木之本に硫酸工場を同時開業する筈であるとのことであつたから、此の鑛山聚落にも近く大なる變化がもたらされるであらう。鑛山の地所については、土倉土着のもので鑛山に地所を賣つたものもあるが貸してゐるものもある由。

今年の雪は此の地方でも大雪で江濃國境には

多くの雪崩が出た。此の谷では普通の雪崩れは、ナデと稱し、粉雪が風で雪面を這り落ち大きくなるものをアワと稱してゐるが、今年一月二十日午前一時に出たアワは猛烈なもので、鑛山の社宅と合宿十一戸を倒した。鑛山での話によつても、雪が降つて固まればいいが粉雪のままであると木の枝などから落ちた雪の塊が大きくなつてアワになる、アワは多くは風のある時に起るとのことであつた。

今年は特に大雪であつた精もあるが、低山地の此の地方にとつては物凄じかりの残雪が認められた。五月十七日だと言ふのに、出口土倉から土倉に至る谷の支谷から雪崩れ落ちた雪は勿論伏流を有しては居るが相當な雪溪をなしてゐたし、出口から土倉への道路も或る地點では雪崩れた堆雪の下をトンネルを穿つて通過してゐたのである。第二圖に見るのがそれで、これが五月十七日に於ける、高度四〇〇〇米に滿たない地點に於ける光景であるとするに驚かざるを

第二圖



得ぬ。筆者は昭和十年五月十八日、中ノ湯から上高地に至る途中釜墜道の出口附近でかかる光景に接したのであるが、彼此相對比して低山地の此の谷の積雪量の驚くべきものたるを知るのである。雪崩の痕跡には、信飛の山地にも見られないやうなものがあり、平年のことはいざ知らず今年の雪崩の非度かつたことが偲ばれた次第である。土倉鑛山に於ける雪崩による惨害の痕は、人間の營作に對して自然の暴力の如何に強大であるかをまざまざと示すものであつたが、雪崩の直後には

階下の疊が二階に飛び上つてゐたり、壁下の竹の空洞にまで雪がぎつしりと詰まつてゐたり、經驗しないものには想像もつかぬ本當に無茶苦茶の混亂を見たとき生残者は物語るのであつた。

八草峠は前にも記した如く、美濃、近江の交通が今より盛んであつた時（美濃の川上での話によると、杉野の杉本と中村との間の御龜堂と川上とは六百年前から關係があつたらしいと言ふ）は相當の人の往來を見たのであつて、峠には伊井直孝侯の植ゑられた直孝松といふのがあり俚謡にも「美濃と江州との境の松はいかい松の亂れ松」といふのがあつたが、今は此の松も枯れて仕舞つてをり、今時こんな峠を越すものは餘程のものずきか何かである。休暇を貰つて川上に歸つた兵が敦賀の聯隊に歸るのに川上から八草を越して木本に出る由であるがこれは特殊の場合である。併し十月十日頃から十一月の終りにかけてと四月とには美濃のものが霞網でツムギをとりに來る由である。併しそのことが

同時に此の峠の交通量の微少を物語るものに外ならないのである。

八草峠（午後三時峠に立つ）を東に降ると美濃の坂内村であるが、峠の附近まで雪崩によらぬ第一次の残雪が少量ながら認められた。五月十七日といふのに。

明治四十二年測圖五萬分一地形圖によると八草峠を下つた坂内村最奥の部落は八草であるがこの部落は今に完全に滅亡してゐる。大正九年に無くなつたと言ふ。元來一つの村（宇、明治以前は八草村）であつて廣瀬の寺（友徳寺）の道場も神社（藤井權現）もある村で川上の出作などではなかつたのであり一時は家が十二軒或ひは十三軒もあつて、山に蕎麥、稗などを作り炭を焼いて生活し、又昔は木地屋も居たと言ふのであるが、大正九年（大正四、五年の頃とも言ふ）八草の村全體、家も林も田も畑も村全體を僅かに參千五百圓で近江側の金居原に賣却してしまつた。（大正九年當時家は八軒であつたと言ふ）

尤もその前からも廣瀬の人に賣つてゐなくらゐで大分借金のあつたためでもあるが、實に安くて村全體を賣つて仕舞つたものである。その後山に景氣が出て金居原の人達は儲けた譯であるが馬鹿を見たのは八草の人達であつた。村の人達を賣つた區長代理何某を怨んでも遅かつた。八草の人達は北海道に渡つたり（十勝に行つたものは成功してゐると言ふ）近江側の木之本、古保利、杉野などに出て百姓をしたりなどしてゐたが、結局うまくは行かずちん／＼ばら／＼になつて仕舞つた。唯金居原に移つた神主某氏のみは故郷忘じ難く夏は八草に歸つて炭焼をすると言ふ。氏神は川上の八幡神社に合祀せられ、家は川上の方でも買手がなく、立ぐされになつて今は一軒も残つてゐない。これを實地について見ると、既に早く雪のために崩れたのであらうか地上に伏して未だ朽ち去らぬ家の上に草や苔の蒸したものが少くとも五軒は認められ、最後まで立ち残つたものであらう萱葺の一軒は新

らしく今年の大雪で全壊してゐる。宅地の跡は未だ歴然と通ることが出来るが、田か畑の跡には杉が植林せられその杉が今年の雪崩でやられてゐるといふ有様。亡びた村の生々しい遺跡ほど凄慘な光景を呈するものも少い。

八草から十町ばかり川に沿つて下つた所の川の右岸、五萬分一地形圖に水田の記號のある地點に一軒の出作りがある。筆者等訪問の際は人が居なかつたが、中には圍爐裡を切り、炊事の道具を置きさしてゐたから、しとねは藁のしとねではあつたが、一時的にここに寢泊りすることもあるであらう。親村川上カカミから山道一里強である。地籍の名はオウチュウと稱する小字の入口であるのでウチュウグチと言ふとのこと。地形圖にも示されてゐる如く立派に水田がある。川上での話によると、田は四段あり、元來は八草のうちであつたが、現在では廣瀬の人が所有し川上の人が小作をしてゐて矢張り出作であると言ふ。

ウチュウグチの下流にカウゾガダヒラと稱する所があり、そこに三軒の出作がある。親村は川上で、例年ならば五月中旬に上り秋十一月まで滞在するのであるが、今年は支谷の空ン谷からアワが降りそれが主谷の川を越して對岸に當りカウゾガ平の出作りを三軒とも壞して仕舞ひ目下家の再建中であつた。空ン谷には五月十七日だと云ふのに尙ほ二俣に分れた雪溪が氷河を思はせるやうに残つてゐたのである。この出作では田よりも畑の方を多く耕す。田は三〇年ばかり前の洪水でやられて仕舞つて僅かである。畑では豆、稗、粟、小豆、馬鈴薯、甘藷などを作る。畑には又、楮を植ゑるが、この土地には自生する良質の楮がある。光澤のある良質の紙になる。従つて値段も倍、ドリ(二倍)である。これがカウゾガダヒラなる地名の起原をなすことは説明の要がないであらう。この出作は相當定住度の大なるもので、五月中旬から十一月までここに止めることは前記の如くであるが、その間は牛も

出作りで飼ふのである。家族は勿論連れて来る。併し神社と寺とは川上の親村にあり、神佛は出作ではまねだけ祀るのみであり八月の祭例や盆などには川上へ歸るのである。冬は川上に歸るのであるが、川上では何をやるかと言へば紙(美濃紙である)をすき、夏のための藁仕事をやりその間には炭焼をやる。牛はその間は舍飼であり八月に刈つた乾草と藁とを踏ませ厩肥を作る。五月中旬出作に上り五月が濟めば出作で炭焼と養蠶とをやるのである。田畑の肥料としては前述の厩肥と春の青草とをイレイチ(交互の意ならん)に入れる。この出作で勞働してゐた人は、ガマハ、バキを穿き背中當てとしては、ミノを用ひてゐた。運搬には主としてセタを用ひるが負ひ繩もあり、後者はジンガイと呼ばれてゐる。

楮ヶ平の下流、矢張り川の右岸にウスキ(白井か、川上にての話によれば白木とも言ふ)といふ小字があり、そこに又一軒の出作がある。現在は川上の宿屋蔦屋の所有であるが、何時何

人が聞いたかは不明であるとのこと。併しこんな言ひ傳へはある。この地所は昔木地屋が小屋をかけ靱を挽く臼を作つてゐたところである。昔は大垣の戸田さんの命によつて徳山と川上とから、^{ダンボク}（段木）を三尺に切つて揖斐の森前^{モリマヘ}（今の北方村）まで流したものである。その仕事に越前からやつて來た職人が稻を植ゑることを教へ稻の種を持つて來て木地屋の土地に田を作り植ゑたところその年二斗の米がとれたので宮を建て宮に献じた。稻を作つたのは勇平^{イサヒ}左衛門、澤崎新左衛門の二人であつた。それ以後七段ばかりの田を作るやうになつたと。これが臼木の傳説である。朦朧としてゐるけれども何かこの土地の歴史を物語るものを有つてゐるやうにも思へる。

から聞いたところによるが、正しいと思ふ。上原の支谷と主谷との合流點附近から望むと、土藏岳の中腹の緩斜面に家が一軒だけ見える。（支谷には五月十七日といふのに尙ほ多量の雪が残存してゐた。）五萬分一地形圖によると水田は土藏岳の中腹、高度七二〇—七四〇米の地點にまで上つてゐるのである。併し上原では炭も焼くらしく、支谷との合流點附近には焼いた炭が置かれてゐた。尙、これは近江側の杉野で聞いたところによるのであるが、上原には以前は上の方に六軒ばかり、下の方に四軒あつたが、今は全部で四、五軒であるとのことであつた。即ち上原では出作は減退してゐるのである。尙、川上の葛屋の主人の談によれば上原の出作りは普通は四月の中旬に上り、十二月の下旬に下るとのこととで、これは楮ヶ平の三軒も同様であるとのことであつたが、楮ヶ平の現地では五月中旬から十一月までと聞いた。楮ヶ平の百姓の言に従ふべく、上原の出作期間に就いては葛屋の主人に

従ふべきか楮ヶ平の百姓に従ふべきかに迷ふが少くとも今年の如き大雪の後では中旬に上るといふことは恐らくあり得ないと考へられる。

川上の北、池ノ谷の字ワ、ンドグチには以前川上の出作が二軒あつたが、そこが水電の貯水池となるため昭和九年十二月になくなつた。因みに水電の工事は昭和十年十二月に完成を見た。

川上は地形圖からも察せられるやうに水害の多い所で、殊に明治二十八年、全二十九年、大正元年の洪水で水田二十四町歩ばかりを失つた。以前は水田も今よりは多く、且つ山畑ヤマバタに稗、粟、蕎麥などを作つたから米を買ふものはなかつたが水害で多くの水田を失つて以來炭焼をするものが殖えた。現在九十三戸のうち米の足りるのは十二、三戸で、他は凡て米不足であるが、それでも川上では家は段々に殖えて來てゐる。水害以前は六十戸、明治三十五、六年でも六十戸であつたのが今は前記の如く九十三戸に殖えてゐる。寄留人は一人だけで他は凡て村の人が分家して

殖えたのであると言ふ。木は豊富で、川上から夜叉ヶ池まで五里あるが、その間が川上の山であり、明治四十二年そのうちの二百町歩ばかりを部落有林野として坂内村に提供したけれども残りは凡て川上のものである。聚落附近の山は個人持であるが一里奥からは區有林になる。炭はこの區有林で焼くのである。夜叉ヶ池附近まで焼きに行くことがあるが、炭焼は原則として目歸りである。炭は焼いても負つて出なければ何にもならないからである。負つて出た炭は川上の里のドシモバ小屋に入れ置き、ここからは車で下へ出すのである。上川に於ける農と山稼ぎとの勞働の配分に就いて大體を言へば、五月、田が終れば草を刈り乾して野の小屋に貯藏し（草の乾燥は土用前に終る）或ひはこれを牛にふませ五月の田の前に入れ、その後春の青草を入れるやうにする。炭焼は普通は四月中旬から十一月終りまでやる。なほ川上では今尙ほ僅かながら焼畑をやる。以前は村の七分が大木原オホキノハラを焼い

て行つたが、今はそれは勿體ないから段々にやらなくなり、僅かに私有地でやるだけである。焼畑は八月上旬に山を焼き八月十二、三日頃に種を蒔いて置くと十月中頃に蕎麥がとれる。但し五、六俵とるのに土地は三段も入用である。次の年は五月末、六月初めに稗を蒔き十月中頃に收穫する。次の年は春乃至六月に粟を蒔き十月中頃に收穫する。次の年は六月に小豆を蒔き十月にとり入れる。次の年は六月中旬大豆を蒔き十月中頃にとり入れる。次の年は五月に馬鈴薯を植ゑ八月に收穫する。それから以後は何回も馬鈴薯を植ゑ肥料として草をやるが、作物が出来なくなれば、普通十年、地味のよい所ならば五、六年も放置すると又作物が出来るやうになる。稗は粉にして米に混せて食べる。食べ難いものであるが滋養があつて婦人の乳をよく出すと言つてゐる。粟は白にして米に混せて食べもし、又粟餅にしても食べる。草間クサマ（草場クサバ）と同意義なるか、或は若干意味を異にするか後の研

究に俟つ）になつてゐる所は以前焼畑であつた所であるが今は焼畑がそんなに行はれないことは前述の如くである。今では炭を賣つて米を買つてゐる譯である。川上ではかうして山稼ぎが盛であるけれども、別段山の神はないらしく、又案外早く開けたものか、カルサン、タチツケの類はもう見られない。（最近流行して來たカルサンが少し見られるが、モモヒキと呼んでゐる）併し、圍爐裏は依然としてあり、上にアマがかり、中にカナゴが置かれてゐる。座の名稱は、ヨコザの右側がナベザ、左側がシモジロ、向側がヒケハシリである。雪には雪ワルヂを穿き、バイハキを火にかけて作つたカンジギを着ける。氏神は村社、八幡神社、また別に夜叉龍神があり、高龍神社といひ里人は雨を祈る。寺は、字下出シモデの小字淨圓寺に同名の寺があつたが山ぬけのため無くなり、今は永平寺派長昌寺。川上淺又は川上の出作であつて、夏、僅かの耕地を耕し又炭焼をするが冬は川上に歸る。普

通は四月中ばに上り十二月中旬まで滞在する。全體で五軒の田小屋^{タゴヤ}がある。併し田小屋と言つても相當な建物で、一軒の如きは杉の背戸垣を有し立派なものである。耕地は、段を作り得る所は田となつて居り、傾斜面は焼畑となつてゐるが、焼畑が雪崩を容易にすることは此處に於

第三圖



抵雪崩いても明瞭である。焼畑の所は今年は大れてゐるのである。第三圖は上流に向ひ川上淺又の出作を望んだところを示す。

ハレ峠を越せば門入^{カドニツ}に出、門入方面は木原^{キハラ}で田

川上淺又から川を溯りホ

を作る外に木挽^{コビキ}をやる由であるが、筆者等は未踏查である。

大草履は、川上の宿の主人から聞いたところでは、廣瀬のうちに出作ではないとのことであつたが、現場での調査によると、大草履^{オホクサリ}（オホジョリとも發音する）には家が六軒あり、三軒は年中居り定住であるが、三軒は田小屋^{タゴヤ}で出作りである。田が主で夏仕着け時に来る。例年ならば五月に来るのであるが、廣瀬の本宅にも作場があるのであるから、子供なども連れては来るが、一時的の寝泊りで、勿論永住ではない。現在定住の三軒も元來は廣瀬のもので、初めは出作りであつたものと思はれるが、早くから定住してゐること。その他尙二軒あり、一軒は定住、一軒は出作であつたが、二軒とも北海道に渡つて仕舞つた。その他、言ひ傳へに尙ほ一軒廣瀬の出作があつた由で、大草履には全體で九軒の家があつたのである。大草履では炭は焼くが焼畑はなく山は木原になつてゐるが、大

草履の起原並びにその語原が燒畑にあることは柳田先生の御説などによつても疑の餘地はないと思はれる。併しそれはそれとして大草履には面白い地名傳説がある。曰く、美濃の安八大夫の中の娘が夜叉ヶ池の主に嫁ぐとき揖斐川を上流へと機を織りながら上つたが、今も美濃の布川として夏川の中に筋が現はれる、今も安八大夫の子孫が安八郡神戶の夜叉龍神の本社の神主として残つてゐるが、その祭(四月十三日)は夜叉池に上つて後でないといはれない、今も美濃の人は雨乞には夜叉池の水を持つて歸るのであるがこの生れながらにして鱗を有してゐた安八大夫の中の娘が小便をした所が廣瀬の深出で、俗に夜叉が小便だと云はれ、娘が草履を置いた所がこの大草履であると言ふのである。大草履では蒲製のハバキ、蒲製のテンゴ、その他ミハ、負ヒ繩が認められた。

大草履の下、深出の上に川上からの出作が三軒ある。併しこれは單なる田小屋に過ぎず、夏

の小屋になるだけで寢泊りはせぬ。川上から近いためであらう。出作にも色々の階段のものがあつて知れる。

大草履の下、前記の夜叉ヶ小便だと俗稱せられる深出には確かに定住の思はれる一軒の家の外に小屋が五軒ばかりある。小屋は晝だけのものであるが、一軒は冬も居り定住である。元來は廣瀬の出作であつてデゴノコヤと稱するが、弟が分家して永住することとなつたものである。出作から定住への推移の過程を示す好例である。田のあることは確かであるが、傾斜地の燒畑らしいものは或ひは草かり場であるかも知れない。

その下流に廣瀬の字サタリといふ地點に小屋が二つあるが、これも晝だけのものである。サタリの對岸、川の左岸は字小倉で、ここには三軒出作があるが冬は勿論廣瀬に住むのみならず、夏も寢泊りするにはするが、ほんのチョコ／＼であると言ふ。出作に種々の段階のあることは

又これによつても明らかである。

廣瀬淺又は上から見ると川上淺又と一直線をなす由であるが、人間の結合から言ふと一方は廣瀬一方は川上に屬してゐる。廣瀬淺又は面白い聚落である。近江側の杉野での話では、廣瀬淺又は廣瀬の出作であつたが、貧乏して里を賣り今は本宅となつてゐることであつたが、現地に近づいての調査によると少し詳しい事情を有つてゐる。川上の葛屋の主人の談によると、廣瀬淺又は廣瀬の東區の出作であつたのが百年も前、東區が火災に罹り、淺又に散在してゐた出作が永住となつた、水田を耕し炭焼をやる二十軒が散在してゐることであつた。現地に於ける調査によれば、廣瀬淺又は廣瀬の出作で冬も住む永住のもの十五軒、夏來て冬歸るもの九軒、併せて二十四軒、夏來て冬歸るものが最近四軒殖えてゐる、尙ほ別に一軒水電の取入口に勤めるものがあるが、これは田をやらな

いとのことである。廣瀬淺又では、畑は殆んど無

く、田が主で田の無いものは炭を燒く。畑がなく桑がないから養蠶は行はれない。焼畑もやらない。冬も永住のものは、神棚、佛壇は持つてゐるが、村には未だ氏神はなく、祭は廣瀬に出る。學校は、夏は、高等科は廣瀬へ、尋常科は川上へ行くが、冬は勿論淺又の公會堂が學校になる。冬廣瀬に出るものは廣瀬の學校へ行く。川上に米の不足であることは前に記したが、廣瀬の淺又から川上に米を運ぶものに筆者等は出遭つたから廣瀬淺又には米は充分とれるものと思はれる。

小倉から下流廣瀬までの間には廣瀬の出作はない。それはその間に耕地があつても廣瀬から通へるからであつて、出作發生の重要な因子は親村から耕地への距離といふことになる。

この邊にも尙ほ雪害の甚しいものが認められるが、一口に雪害と言つてもナダレとアワとによる被害には自ら相異があることを知らなければならぬ。川の両側の斜面からナダレが落ちるとして、ナダレならば川へ落ちるだけであるが

ア、だとすると川を越して對岸にまで達するばかりでなく、對岸の斜面を若干這ひ上ることすらあるのである。杉林が谷の方へでなく、反對に山の方へ薙ぎ倒されてゐる現象はこのア、の作用から説明がつく。今年この谷の斜面に於いて森林の被つた損害は莫大なものであつたし、鐵框の送電用支柱が倒された上に飛んでもない方まで運ばれてゐるのなどを見ると、この谷のナダレ（ア、並びに普通のナダレを含む）の猛烈さに驚かざるを得ぬのである。

廣瀬は廣瀬兵庫の居城のあつた所でこの谷の主邑であつた。現在でも家が百五十軒ばかりあり相當な聚落である。北・西・東の三區に分れてゐるが、北區が最も大きく明治二十二年までは北區だけで人家は百二十軒に達してゐた。北區の氏神の所に九軒あつたものが、明治十七年火災に罹つた頃からそろ／＼北海道などに渡るものが多くなつた。明治二十二年の百二十軒はその後大いに減じたが今でも六十軒はあり三區の

うちでは北が最も大きい。併し廣瀬兵庫の居城は神社から大谷川を隔てた東の所にあつたのである。氏神は廣瀬神社、昔は五社大明神といつたもので北・西・東三區の總社であり北區に鎮座、四月二十日が祭である。今の役場のある所を字ミヤシロといふが、大同二年そこから今の地に移り八幡宮を合併したものと云ひ傳へてゐる。神社の前には觀音堂があるが、これは圓光山長福寺で兵庫殿の守り本尊であつたと言ふ。寺は東の區は禪宗永平寺派、北區と西區とは眞宗である。各區は出作の地區を異にしてゐる。北の區は大谷川の上流へ炭焼に行くが日歸りであり出作ではない。西の區は廣瀬淺又の下まで、東の區は廣瀬淺又まで出作に行くのである。廣瀬では米は昔から足りてゐたと言ふから（廣瀬淺又から米を川上へ運んでゆく理由も一層はつきりして来る）出作は廣瀬に於ける人口の増加によつて誘發せられたとも考へられるが、尙ほ、明治二十八年夏夜又池の新池が切れて川沿ひの田

が流されたことも考へに入れられなければなら
ないであらう。畑では昔は楮を作り、冬になる
と紙をすいたさうであるが、今は畑では楮に替
つて桑が作られ、紙は殆んどすかれず、春蠶が
飼はれる。但し今年は春蠶は駄目であつた。焼
畑は餘り行はれぬらしいが、廣瀬の少しく下流、
川の左岸なる斜面に昨年夏焼いたといふ焼畑を
見たから、焼畑が全然行はれない譯ではないこ
とも事實である。牛は主として耕作用であるが
土地で産まれ、大體一軒に一頭は居る。牛小屋
をウマヤと言ふ。犢は四ヶ月くらゐで賣り、親
牛は普通三才乃至六才で出す。博勞が交換に來
るのである。農具のうち鋤は土地で作るが、鎌、
鋸などは一軒の農具金物屋で商ふ。この金物は、
越前から揖斐町經由で入るさうである。米はミ
ヅグルマ、カラウス（江州でガツタリと稱する
ものに當る）シヤクグルマで搗く。飲料水に就
いては清水の出る所があり、そこが又物を洗ふ
コド（江州のカハトに當る）となつてをり、萱葺の

屋根をかけたなりなどしてゐるが、何軒か共同の
もので、飲料水もそこから得てゐるところがあ
る。食用として珍らしいものにはヒョビと稱す
る木の實がある。ヒョビは櫃に似た木だ相だが、
その實を搾つて油をとる。油は食用となるのみ
ならず燈用にもなる。種油だと冬は凍つて駄目
であるが此の油ならば凍てゐることはないと言
ふ。冬は寒くて雪も多い譯であるが、雪にはワ
ラゲツを穿き、またカメゲツにカンジキをかけ
る。廣瀬が昔から此の谷の主邑であつたことは
前にも言つた如くであるが、今も相當多くの人
間の集り住む所で他からも色々の物資が入る。
百五十軒のうちに雜貨屋が四軒あり（前記金物
屋はこの外）揖斐からは入る日用品を商ひ、また
尾張一ノ宮や美濃關などから呉服屋などの行商
人が入り、富山、奈良から賣藥の行商人が入り
込む。尙、これは、とりとめもないことではあ
るが、廣瀬は廣瀬淺又から鳥越峠を経て江州東
淺井郡草野の方と何等かの關係を有したのでは

ないかと思はれる。廣瀬に「美濃で名高い夜叉の池、どつこいどぶ池、大阪では鴻ノ池、美濃で名高い夜叉の池、いやまかやめがごけせる」という江州音頭の歌詞があるのは漠然たる證據であるとしても、草野のヨシロは廣瀬から行つたものであるとの言傳へは若干その間の事情を物語るやうにも思へる。

尙、廣瀬の北方に聳える蕎麥粒山は相當いい山で登頂心をそそるが、山が蕎麥の粒に似てゐる故蕎麥粒山と名づけたなど云ふのは他所の人間で、廣瀬の人達はソムギ山と稱してゐると言ふ。ソムギならば柳田先生の「地名の研究」などによつて大體解決がつくのであるが、ソバツプとかソバコでは俗稱と云ふの外ない。廣瀬では山行のナタはナタカゴに入れてゐる。

坂本には家が百五、六十軒あり、別に白川にも家が十五、六軒ある。米は不足であるが、畑を作り炭を焼いて生活の足しにする。白川の十五、六軒といふのは、以前は如何であつたかは

知らず、現在では何れも定住であり、田と畑を作り、また炭を焼いて生活してゐる。坂本からは白川、諸家を越して南方のシナマタ（諸家の東南に當る）へ出作をする。その出作が八軒あり（これは五萬分一地形圖上にも讀める）米作と養蠶とをやる。植付けと草とり、養蠶（夏蠶）と收穫に家族全部で出かける。大體五月中旬（六月初めとも言ふ）から十一月一杯に亙る譯であるが、二、三軒は五月半ばから上ると言ふ。坂本の本宅にも田がある場合が多いから、その場合には出作の田を終れば坂本の田を作りに歸り、また養蠶は坂本に歸つてやるとの説もある。シナマタの出作に上つてゐる間は、子供は諸家の分教場に出る。冬は坂本に下るのであるから勿論坂本の學校に出、夏中でも坂本に下つてゐる間は坂本の學校に出る。但し高等科の生徒は常に坂本の學校に出る。かく出作から學校に通ふ子供もあるが子供や老人は村に止ることが多いとも言ふ。この出作では養蠶もやることは前に

も記す如くであるが、それは夏蠶だけであり、秋蠶は寒くて飼へず、春蠶に至つては絶対に駄目であるといふ。この出作には田と桑畑とがあり田を主とするが炭焼もやり、炭焼の時はシナマタに滞在する。併し祭の時は坂本に歸することは言ふまでもない。何れにしてもこの坂本からシナマタへの出作は一種特別のもので、坂本にも田があるといふ關係から、夏中といつても充實的に出作に寝泊りすることはできないやうで、大體田の植付け、草とり、取り入れに泊りがけで出かけると言つた方が適當かも知れない。出作で養蠶をやつたり、炭焼をしたりすることを考へると複雑になるだけである。そしてこの坂本の田と出作の田とを兩方とも作れるといふのはシナマタの出作(高度七〇〇米を越す)が植付けにしても收穫にしても坂本の田に相當日數先んずるからである。シナマタとは別の方面で、坂本から日坂に至る道に沿つたサブダニにも三軒ばかり坂本の出作りがあるが、ここへは家族總

出のこともあるが總出でないこともあり、子供や老人は多くは村に残るのである。草取りには泊らぬこともあるが、植付け、取り入れには泊ることが多いといふ。併しこの程度のもので坂本では出作(ツツキ)と稱してゐるのである。出作りに種々の楷梯のものがあることは又此の事實によつても明瞭である。但し坂本から辨當持ちで白川の山へ行く如き日歸りの勞働までを出作と稱するのではないらしく、こんなのは辨當持ちで山へ行くと云つて居る。尤も日歸りであらうとそこに耕地を持つてゐて、植付け、草とり、取入れなどに行くのならば出作りといふのかも知れない。識者の御示教を俟つ。尙ほ坂本からは、村外ではあるが、下流の川尻にも出作する。川尻の下の方の六軒(津汲にての話によれば五軒)は横山の出作で永住であるが、上の方の三軒は坂本の出作である。寝泊りすることもあるが行きさきりではなく出作の田が濟めば坂本に歸つて坂本の田をやることは前に記したのと同様であり、

また子供等は學校があるので連れては行かぬ。かうした種々の楷梯に於ける出作の存在から考へると前述の白川の如きも以前は坂本の出作りであつたのではないかと考へられる。白川には未だ氏神も寺もなく、何れも坂本にあるといふことも此の間の事情を物語るやうに思へる。(白川は坂本の延長だと言つて仕舞へばそれまでであるが)現在でも學校は白川にはなく坂本の學校に出るのである。因みに白川から坂本への冬の通學は、雪崩れやアワのために甚だ危険で、父親が子供を學校まで送る相である。併し案外なだれやあわには當らぬものだと言つてゐる。

諸家^{モロカ}には家が六十軒ある。川上の蔦屋の主人の談では、三、四十軒とのことであつたが、坂本での話によれば六十軒と言ふ。そして何れも定住である。田は多く米は足り出作をする必要もない。學校も分校はあり神社もあるが寺は坂本にあり、學校も高等科の生徒は坂本まで出なければならぬ。冬は坂本に宿つて通學するの外

ない。諸家の衆^{シムラ}は、その奥(新穂峠の方面及び目坂の方面)に行くと、坂本の人には教へて呉れたが、これは出作りではなく山稼ぎであらう。

諸家から西南に向つて上ると近江との國境、新穂峠に出るのであるが、この峠は今でも若干は利用せられてゐる。江州木之本には有名な牛市が立つので、市牛を買ひにまた持牛を賣りにこの峠を越すものもあるのである。

川尻に坂本からの出作が三軒、横山からの出作が六軒(津汲にての話によれば五軒)あることは前に記した如くであるが、川尻から下流には出作らしいものはないやうである。川尻は横山も西横山のうちでその五軒は永住である。五萬分一地形圖に椿井とあるのは椿野の方が正しいやうであるが、椿野の五軒も西横山のうちで、西横山の氏神(無格社)が此處にあるくらゐで定住である。西横山はそれ等のものを入れて合計八十軒であるが凡て定住である。

鬼姫^{キメ}生は東横山のうちで十一軒くらゐである

が、氏神を有し、永住、親も二十軒くらゐであるが、永住、これ等を含めて東横山には百三十四軒あるが凡て定住である。西横山も東横山も大體農と山稼で生活してゐる譯であるが、米は不足である。横山はこの谷の一中心地で乗合自動車の發着點になつてをり、旅館や商店などもある。氏神は西東とも八幡神社。

森下には、對岸から見たところ、家が九軒あるらしいが一軒は倒れてゐる。神社は九戸坂にあるが(無格社天照皇大神)氏神は西津汲の住吉神社といふことになつてゐる。寺は西津汲にある。元來は何處かの出作であつたかも知れないが現在は完全に定住で出作ではない。萱原(カヤハラ)をもち、尙、牛は家で飼つてゐる。

檜原には家が十七軒あり氏神は白髮神社であるとか。

九戸坂には無格社天照皇大神があるがこは西津汲の住吉神社を氏神としてゐるといふ。

津汲の河岸に鮎築獵の番小屋が認められる。

築は個人持のものと共有のものとあるが個人持の方が多いと言ふ。現今では縣の許可を得て鮎をとるのであるが、村の收入を助けることは、炭焼、養蠶に次ぐとのこと。鮎は釣るものも多く、村人の六分はその鑑札を有してゐる。六月十日頃解禁になるのだが九月の中旬になると釣れなくなる。築は下鮎をとるのだが九月になると盛んになり十月一日乃至十五日迄のものであると。

西津汲には家が百四十五軒あるが米は不足で揖斐方面から買ふ。米は商人が入れるが近年は信用組合の利用が多くなりつゝある。西津汲で米を買はぬのは十軒くらゐで他は多くは炭焼と養蠶とをやつて生活を補ふ。焼畑も少しはあるが殆んど行はず、楮の如きも今は作らず、山の斜面には茶を作るが大したことはなく、養蠶を除けば炭焼が専門であると言つてもいいくらいである。材木の出るやうな山とてはなく炭専門である。夏の農繁期と養蠶の時とを休むだけで

年中焼く。而も、炭焼專業の六十戸のうち三十戸は夏も休まず焼くのである。製品は四貫匁にして出すのであるが、運搬具には背板がある。

西津汲にとつてはさして重要なものではなく、またこれは西津汲に限つたことではないが、山の草生地には區有、村有、個人有の區別がありまたその用途に従つて萱場カヤバと秣場モクバ若しくは草場クサバの二つに分けられる。前者からは主として屋根の材料たる萱をとり、後者は普通の草刈場になるのである。尙、西津汲からは西津汲から小坂に至る間の所に出たものが二軒あるが、これは定住である。西津汲、氏神は住吉神社。

小坂も定住であり、下村、上村また同様であつて、日坂にも出作はない。總じて坂内村には出作があるが、久瀬、藤橋（大正五年久瀬村より分る）兩村には出作はないと言はれてゐる。日坂には家が七十軒ばかりあるが何れも炭焼専門であるといつていいらしい。日坂では年中炭を焼くのである。美濃も揖斐郡は炭焼の本場ら

しいが日坂などはその代表的なものであらう。氏神は春日神社。

小津にも西津汲と大體同數の家、即ち百四十軒ばかりの家がある由であるが、これも炭焼の本場で、炭焼は西津汲に於けるよりも更に盛んであると云ふ。氏神は白山神社。

東津汲には家が七十軒ばかりあり氏神は白髮神社であると言ふ。

外津汲トツグミには家が四十六軒あり、氏神は海神ウミガミ々社とかいふ。

檜平には家が五、六軒（或ひは七、八軒とも云ふ）あるが永住で東津汲のうちである。

乙原には家が四十五、六軒あり、氏神は白髮神社の由。

三倉には家が四十五軒（或ひは四十七、八軒）あり氏神を峯神社ミネノカミといふ。

津汲から下流の筆者等の觀察は愈々粗漏になる。その一因は、津汲から下流の聚落が次第に山村の色彩を失ふにつれ筆者等の興味が薄らいだ

といふ事實にある。併し粗漏は粗漏であつてその點ここにお斷りして置かなければならない。

尚、山村とつきものの山の神に就いては殆んど記さなかつたが、近江との國境から揖斐に出るまでの揖斐川の谷にも矢張り山の講があつて山の神を祭るさうである。その方式には色々あるだらうが、津汲で聞いた話によれば、山の神の祠はないが、氏神に一定の松の古木があり、そこに山の神を祭る。一月九日松の木を以つて珍寶の形を作り太い七五三繩に吊して下げ、竹の筒で神酒を上げ、當日は山に入らない相である。此所では餅は上げず、また秋には山の講はない由。山の神は美濃の平坦部からこの谷でも坂内村の奥まであるといふが、方式は少しづつ異なるのであらうと思ふ。因みに津汲でも水の神は聞かないとのこと。

山では獵も盛んだらうと思ふ人もあるかも知れないが、この揖斐の谷では獵は餘りやらぬやうである。近年は鹿が多くなつて來て、今冬は

生捕りにした由であるし、坂内村の方では昨年猪が一、二頭出た由であるが、津汲には殆んど出ず、津汲には獵師が居て山鳥や猿、狸などをとる由であるが大したことはないらしい。

揖斐の山林と揖斐の峽谷とを結びつけて筏のことを考へる人もあるかも知れないが、それも餘り盛んではない。久瀬、藤橋の兩村から北方村森前まで出すこともあるが年によるといふから大して盛であるとは言へないであらう。

揖斐の山地は實際日本での深雪地帯のうちに入れられていいであらう。殊に今年の冬だけ考へるならば揖斐の山地は斷然日本の深雪地である。標高一五〇米に達しない西津汲の聚落で今冬は八尺乃至九尺（平年は三尺以上のことは少い）積り、カンジキを用ひたくらゐであり、約一ヶ月ばかりは交通も殆んど杜絶して、食糧の缺乏に脅やかされたのである。十二月十日から二月五日まで降り積り、消防組が出たのであるが中々埒が開かず、三月初旬に至つて、三ヶ

月間通じなかつた道が漸く開いたのであるといふ。因みに、このやうな大雪は今から百五年前にあつたとの記録が、春日谷香六、小宮神の寺

の記録にあるとのである。

(昭和十一年九月十五日稿)

安藝の名勝二級峽及白糸瀧 (一)

吉 野 益 見

目次

緒言

總説

一、地形 二、地質 三、名稱及區域

各説

一、上段峽

A、弧狀曲峽 B、東西直峽 C、南北直峽

二、二級瀧

A、上段瀑 B、狭間峽 C、下段瀑

D、二級瀧附近の景

三、下段峽——南北直峽

四、二級吊橋下流の景

安藝の名勝二級峽及白糸瀧

五、白糸瀧

附説

一、動植物 二、厠穴 三、瀧 四、二級峽の特色
五、開發的施設 六、藝文 七、參考圖書

緒言

二級峽は安藝國賀茂郡郷原及廣の兩村に跨りて黒瀬川の下流に在り。白糸瀧は廣村白糸川に懸り前者の南西二・五紵に在り。前者は呉市の北東約六紵、廣村電車交叉點より北約四紵に當り自動車の便を有す。余は昨夏懸命により再度地方人士と共に實査の機を得たれば、茲に之を